

川上弘美「神様」「草上の昼食」論

——「わたし」と「くま」の関係における意味の不確定性——

石川 拓音

一 はじめに

川上弘美「神様」(『GQ JAPAN』第二巻第七号、一九九四年七月)は、語り手の「わたし」が「くま」にさそわれて散歩に出

るという掌編小説で、第一回パスカル短編文学新人賞を受賞した、川上の実質的なデビュー作である。選考委員だった井上ひさしは、「のんきでユーモラスで童話っぽいのですが、その底には隣人とか、人間と動物の関係を掴まえ直したいへんいい薬を含んでいる」と激賞し、この時点で早くも、その後の川上の作品群に示されることになる異類のモチーフに注目している。実際に川上は、「神様」が雑誌掲載された五か月後に、公園で拾った「雛型」と生活する「物語」が、始まる」(『中央公論文芸特集』第一一巻第四巻、一九九四年一月)で文芸誌デビューを果たし、その一年半後には「蛇を踏む」(『文学界』第五〇巻第三号、一九九六年三月)で芥川賞を受賞す

る。「神様」は発表から約四年が経過して、雑誌『マリ・クレール』(第一六巻第一一号)第一七巻第六号、一九九七年十一月(一九九八年六月)に連載された、異類を主なモチーフとする同様の作品群と共に短編集『神様』(中央公論新社、一九九八年九月)の表題作として単行本化される。

よく分からない異類との関係は、川上弘美の先行研究において中心的に論じられている観点だと言える。青柳悦子は、川上の人間の捉え方と、フランスの思想家モーリス・メルロー・ポンティの思想との呼応を指摘し、主体が、対象との相互的な「含みあい(implication) (相互嵌入)」の関係にあることを考察する一方で、「とりわけ『神様』の諸短篇がそうであるように、川上弘美の物語はすべて容赦のない別離の物語である(そこでは記憶すらも消失する)」として、異質な他者の到来と併せて顕在化する齟齬を読み取っている。

また、青柳論を踏まえた高柴慎治は、異類と関係する川上の小説における「わたし」が「人間でありながら人間ではないものに二重

化する」とし、人間に「親和できない「わたし」の想像力」が、「二重化した異類」を引き寄せると指摘している。このような高柴の評は、「神様」の後日譚とされ、短編集『神様』の最後に収録された「草上の昼食」(『マリ・クレール 日本版』第一七巻第六号、一九九八年六月、原題は「草上の昼食」)の、「わたし」と「くま」の関係が断絶する物語内容を踏まえてのものであり、「神様」「草上の昼食」を通じた両者の関係について「二重化が消滅するとき、ささやかな出会いと親和は失われていく」という読みを提示している。

以上の論考はそれぞれ首肯できる点が多い反面、「神様」における「わたし」と「くま」は、相互嵌入の関係にあるとはいえず、一瞬の抱擁を交わして部屋に戻った「わたし」のあり方に、異類同士⁴の断絶や別離を読み取ることは留保が必要だろう。一方で「神様」とは対照的に、「くま」が故郷に帰る決心をする「草上の昼食」は、そのような読みを明確に提示する小説であるとも言える。そのため、「神様」「草上の昼食」を併せた読みは、両作を川上文学に位置づける際に一定の成果を上げているものの、やはり「神様」については、「草上の昼食」によって過度に意味が規定されることで、その独自性が看過されてしまっている向きがあると考えられる。

実質的なデビュー作である一方で、その後の作品群とはやや異質である「神様」は、川上文学においてどのように位置付けることができるのか。そして、ともすれば「神様」における「わたし」と「くま」を、類を異にする者同士の関係として規定してしまう「草上の昼食」が、両作の連関において何を示しているのか。以上の問題について考えるために、本論ではまず、「神様」がどのような物語と

してあるのか、その独自性を確認し、それを踏まえて、「草上の昼食」との連関を通して、両作が何を示し、それが川上文学においてどのように位置付けられるのかを論じていく。

二 「くま」の異質性と同質性、意味の不確定性

本節では「神様」について、まずは先行研究を踏まえながら、その独自性を確認していく。「神様」は川上にとって新人賞こそ受賞したが、原稿用紙一〇枚ほどの長さしかなく、短編集『神様』に収録されるまで、約四年が経過している。その期間に、川上は芥川賞を受賞し、すでに作家としての地位を確立している。「神様」はデビュー作でありながら、その後の活動を後追いするような形で、短編集の表題作として読まれ評価されることになる。

短編集『神様』が刊行される以前の論として早くは清水良典⁵が、「神様」が「私たちのふだんの「一日」のフレーム内に、正確に納まっている」、「まったく凡庸な私たちの日常の写し絵に他ならない」ことを踏まえて、「ファンタジーを豊かにたたえていながら、ヒロイックな幻想に染まることなく、いわば決して盲目になることなく、「フツウ」のまま物語りきること」に、川上の資質を見出している。

「神様」の日常性についての清水の指摘は、同様に「物語」という評言を用いながら、戦後の「ビルドゥングスロマン」が機能不全に陥っていくという文脈において川上作品を読み解いた大塚英志⁶の論にも通じる。大塚は、「くま」が去って「わたし」に何の変化も生じないのは「物語」によって「わたし」を回復したり獲得する必

要が彼女にはなく、彼女は自明の存在としての「わたし」であるからではないか」として、「物語」を飼い慣らしている」という川上が「機能不全に陥った「物語」に無効を通告せずに、ただ「わたし」と「物語」が乖離したそういう「現実」をあるいづくしみを持って記述している」と考察している。

これらの論に提示される、「神様」が「わたし」と「くま」の何でもないただの物語としてあるという見方は首肯できるものであるが、その一方で、そのような物語のあり方は、加藤典洋^⑦が「いったいこれは何だろう。作者の「つもり」が見えない」と戸惑いを示したように、「神様」をどのようにも意味付けできない、もしくは反対に、あまりにも単純に意味付けできてしまうという状態に陥らせる。「神様」の意味の不確定性について、ここで、「わたし」と「くま」が川原で「男性二人子供一人の三人連れ」に出会う場面を確認したい。

「お父さん、くまだよ」

子供が大きな声で言った。

「そうだ、よくわかったな」

シュノーケルが答える。

「くまだよ」

「そうだ、くまだ」

「ねえねえくまだよ」

何回かこれが繰り返された。シュノーケルはわたしの表情をちらりとうかがったが、くまの顔を正面から見ようとはしない。

サングラスの方は何も言わずにただ立っている。子供はくまの毛を引っ張ったり、蹴りつけたりしていたが、最後に「パーンチ」と叫んでくまの腹のあたりにこぶしをぶつけてから、走って行ってしまった。男二人はぶらぶらと後を追う。

（「神様」一二―一三頁）

「神様」における「くま」は、人間と生活し人語を話すことができる、「雄の成熟したくま」である。動物の「くま」に対する「男性二人」の視線は一見すると差別的に思える。しかし一方で彼らは、人間が現実取る行動とは異なり、動物であるはずの「くま」を「異質な他者」として、じつと見つめたり逃げ出したりするようなことをしない。「三人連れ」にとつてあくまで「くま」は人間との同質性を共有しているからこそ、「子供」が特異な視線を真つ先に向けた際に、「男性二人」は「くま」と目を合わせることを避け、関わらないようにしているのである。

「三人連れ」の場面は、「神様」において「くま」を意味付けることのジレンマを示している。つまり「男性二人」の視線は、「くま」の異質さを強調すると同時に、紛れもなく彼らが「くま」と同質であることを意味してしまうのである。その逆もまた然りであり、「くま」は、人間との異質性と同質性、どちらかを強調して一義的に意味付けることを拒否する存在だと言える。

それだけでなく、このような両義性を持つ「くま」は、裏を返せば、現実の動物の「くま」と同質であり異質であると言い換えることができる。また、そのような「くま」と共存する「わたし」や「三

人連れ」などの作中人物も、現実の人間と同質であると同時に異質であると言えるだろう。「くま」と人間、それぞれが現実の「くま」と人間と同質であり異質であることで、「神様」の、現実と虚構が混在し、その混在具合が不確かであるという物語世界の特異さが形作られるのである。

高柴慎治⁽⁸⁾は、「ここが『三人連れ(特に二人の男性)』によって代表されるリアリティの水準と、『わたし』と『くま』によって形成されているファンタジックな水準とが交差している場面」であることを指摘し、「ファンタジックな文脈とリアルな文脈とがぶつかりあって、具体的な意味の形成が困難になっていくこと、そのことが部分部分の意味の形成だけでなく、全体の意味の形成にまで及ぶ」とで、「神様」が「意味の形成が挫かれ、物語の形成が挫かれつづける」という、物語としてはきわめて逆説的な物語」であると論じている。高柴の指摘は首肯できるものであり、「神様」に対して提示される読みは、そのように意味付けた読み手の恣意性を不可避的に示すことになると言える。「神様」のテキストと、それに対する「神様」の読みは、意味付けることにおける解消不可能なズレを孕んでしまうのである。

加藤典洋⁽⁹⁾は、「神様」の強さは、ですからどのような意味にも着地しないその宙ぶらりんの強さです」として、川上の「神様」が「新しい時代の到来を告げている」と評している。しかしそれでは、このような意味付けできない「神様」を読み解くためにはどうすればいいのか。この問題を前提に、「コミュニケーションという切り口を否定的媒介に」しながら、場面の分析を通じて「神様」を論じた

松本和也⁽¹⁰⁾は、「三人連れ」の場面から、「神様」が「露骨な差別の視線・言葉をも抱えこみ、その上で類を異にする他者同士——『わたし』と『くま』のコミュニケーションの可否を問うた、その意味で実に問題含みの小説」であり、それと同時に抱擁の場面を踏まえて「『規範』に守られない地点へとふみだしたコミュニケーションへの意志や勇氣、さらにはその重要性を再認識させてくれる小説でもある」と指摘している。

これに対して関谷一郎⁽¹¹⁾は批判的な立場を取り、「わたし」と「くま」は互いの距離を保つのではなくあくまで埋めようとしていることを指摘し、「神様」が「類の絶対神を守って自己閉塞することもなく、共存し合う夢を見せてくれる」テキストであると結論付けている。「神様」の先行研究では、人間の「わたし」と、類を異にする動物の「くま」のコミュニケーションについて、「他者」という言葉がキーワードとして散見される⁽¹³⁾。関谷が批判しているように、確かに「くま」の「他者」性を読み取る先行研究は、人間と動物の二分法に囚われるあまり、「神様」における「わたし」と「くま」の関係が、異質な他者との分かり合えなさを示しているという読みに固定化されている観がある。

ただし「神様」に類を超えた好意的な関係を読み取る関谷論も、「わたし」と「くま」が異類同士であるという前提から自由であるとは言い難い。先に確認したように、「くま」が両義的な存在であることを発端に、「神様」は、人間と動物、現実と虚構といったあらゆる二項対立を曖昧にさせる物語である。そのため、青柳悦子⁽¹⁴⁾が指摘するように「川上弘美の作品世界で提示されているのは、ヘコミ

ユニケーション」という概念と根底的にあいれない関係の様態、主体と客体との二分法を撤廃するような人間存在のあり方であり、「くま」を異質な他者として断定するのではなく、「わたし」と「くま」がどのような関係にあるのかを明らかにすることが、「神様」を読み解く鍵になるのではないか。

その点で、コミュニケーションとは対極な「規範」を経由することで、「わたし」と「くま」の会話が間接化されることを分析した松本和也⁽¹⁵⁾の論は、「神様」という意味付けが困難な物語において、両者の関係を再考しようとした意欲的な試みだったと言える。しかし問題は、コミュニケーションの可否という二元論ではなく、両者の関係が物語においてどのように機能しているのか、という点にあるだろう。そこで次節では、本節で示したような意味付けできない「くま」が、「わたし」ととつてどのような存在としてあるのかについて検討し、両者の関係を踏まえて「神様」の読みを深めていきたい。

三 ただそこにいる「わたし」と名前のない「くま」

三つ隣の部屋に引っ越してきた「くま」は、「わたし」に引っ越し蕎麦と葉書を渡しに来ると、「以前くまがたいへん世話になった某君の叔父」(二〇頁)と「わたし」が遠い親戚にあることが分かり、その「縁」⁽¹⁶⁾に「くま」はたいそう感じ入る。一方の「わたし」にとっては、「くま」との「縁」⁽¹⁶⁾は「あるか無しかわからぬような繋がり」に過ぎず、それをどう思っているのかは分からない。

このような「わたし」と「くま」の関係について、石川義正⁽¹⁶⁾は、両者が等価交換に基づかない、「おたがいのあわい好意によってかろうじて成立している「あいだがら」」にあり、「実質的にほとんど関係らしい関係が成り立っていない」ことを指摘している。石川の指摘は首肯できるものであり、「くま」は「わたし」との「縁」⁽¹⁶⁾に感じ入っているが、「わたし」ととつての「くま」は実際には集合住宅の隣人に過ぎないのである。

そんな「くま」と、「わたし」は散歩に出る。「くま」は動物であり、特にその身体の異質性が露見した時、周囲から注目を集める。例えば、先の「三人連れ」の場面では、身体の違いに興味を持つ「子供」によって、「三人連れ」がそばに寄ってきたと言える。また、「シュノーケルはわたしの表情をちらりとうかがい、ある心の動きが「わたし」に兆しているのを想定しているかのような態度を取る。「くま」と散歩に出ることで、「わたし」は、「くま」と関係を持つ存在であることが、不可避的に示されてしまうのである。

しかし、「三人連れ」が去ってから、「そりやいろいろな人間がいますから」と言う「くま」を前に、「わたし」は「無言でいた」⁽¹⁷⁾。先行研究での指摘とは裏腹に、ここでの「わたし」の心の動きは、分からないとしか言い様がないのではないか。また、この場面が続いて、川原において「くま」は「右掌をさつと水にくぐらせ」という周囲とは異質な方法で大物の魚を掴み上げ、注目を集める。「釣りをして人たちがこちらを指さして何か話している」(二四頁)が、その「何か」までは分からず、「こちら」にいる当の「わたし」は、魚を干物にする「くま」を「何から何まで行き届いたくまであ

る」と人物評で語るのみである。「くま」との関係が他者によって注目され、「何か」意味が見出されていそうな気配が示されながらも、実際にはそれに対する「わたし」の心の動きを読み取ることができないのである。

言うなれば、「わたし」の心の動きは「わたし」にしか分からない。そもそも「わたし」は、「神様」において年齢も性別も職業も明らかにされない。このような「わたし」の秘匿性には、「くま」との関係において「わたし」がただそこにいるという事実しか読み手に示されるものがないのである。「くま」を直視しない「男性二人」とは対照的に、「わたし」が「くま」と散歩をしているのは、「くま」にさそわれたからであり、それ以外に分析することが不可能なのではないだろうか。「わたし」は「くま」にさそわれたから散歩に出て、お願いされたからオレンジの皮を差し出す。「わたし」は「くま」との関係において、ただ「わたし」としてそこにいて成り行きに身を任せているのである。

そのような「わたし」とは対照的に、「くま」は「あるか無しかわからぬような繋がり」に過ぎないはずの「縁」^{えにし}によって「わたし」に好意を抱き、他の隣人とは一線を画した親密さを前提に散歩にさそう。「わたし」との関係における「くま」の親密さは、例えば、川原で「くま」が「わたし」に子守歌を歌うことを「真面目に訊く」（一五頁）という点に認められるだろう。「わたし」は「くま」に託して子守歌を歌われ得る対象としてあり、そこには好意を超えた、例えば親子のような、庇護の論理に基づいた関係を透かし見ることができる。

しかし、「くま」は確かに「わたし」との親密な関係を前提にしている一方で、読み手としてはこのような関係を意味付けることがどうしてもできない。なぜなら、「くま」が散歩において想定している「くま」との関係が、絶えず揺らぎを見せているからである。ここで、「神様」結末部を引用してみたい。

「抱擁を交わしていただけますか」

くまは言った。

「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。もしお嫌ならもちろんいいのですが」

わたしは承知した。

くまは一步前に出ると、両腕を大きく広げ、その腕をわたしの肩にまわし、頬をわたしの頬にこすりつけた。くまの匂いにする。反対の頬も同じようにこすりつけると、もう一度腕に力を入れてわたしの肩を抱いた。思ったよりもくまの体は冷たかった。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたような気持ちです。熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。それから干し魚はあまりもちませんから、今夜のうちに召し上がるほうがいいと思います」

部屋に戻って魚を焼き、風呂に入り、眠る前に少し日記を書いた。熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。悪くない一日だった。

（「神様」一六一―一七頁）

「親しい人と別れるときの故郷の習慣」である抱擁を交わした「くま」が「遠くへ旅行して帰ってきたような気持ち」になることを踏まえ、「くま」にとつてここでの「わたし」は、庇護すべき子供としてあるよりも、むしろ自分自身を慰撫してくれる親や、付き合の長い恋人、友人のような存在に感じられたと考えるのが自然だろう。「くま」の故郷とはどのような場所なのかも、「親しい人」が誰を示すのかも分からない。「親しい人」同士であることを認め合ったことで、確かに「わたし」と「くま」が親密な関係であることに異論はない。しかし、「熊の神とはどのようなものなのか、想像してみたが、見当がつかなかった」という当の「わたし」にとつて、「くま」との関係は、ただなんとなく親密であるに過ぎないのである。

このことを踏まえると、「わたし」と同様に「くま」も、どのような関係を想定しているのか分からないという点において、秘匿性が認められるだろう。その意味で「くま」は、川上弘美自身が言及しているように、実は「なにを考えているのかわからない怖い奴」であるのかもしれない。「わたし」と「くま」の関係は、「わたし」と「くま」の関係でしかない。このような両者の関係の同語反復は、前節において人間との異質性と同質性どちらかを強調して意味付けることができないという、「くま」としての「くま」のあり方、そしてただそこにいる「わたし」としての「わたし」のあり方と相似形をなしている。それに加えて「わたし」と「くま」の関係について、その意味の不確定性を象徴しているのが、「くま」が「わたし」

との関係において名をなのらないことである。

そのくまと、散歩のようなハイキングのようなことをしている。動物には詳しくないので、ツキノワグマなのか、ヒグマなのか、はたまたマレーグマなのかは、わからない。面と向かつて尋ねるのも失礼である気がする。名前もわからない。なんと呼びかければいいのかと質問してみたのであるが、近隣にくまが一匹もいないことを確認してから、

「今のところ名はありませんし、僕しかくまがいらないのなら今後も名をなのる必要がないわけですね。呼びかけの言葉としては、貴方、が好きですが、ええ、漢字の貴方です、口に出すときに、ひらがなではなく漢字を思い浮かべてくださればいいんですが、まあ、どうぞご自由に何とでもお呼びください」

（「神様」一〇——一頁）

ここで「わたし」は唯一、「くま」との関係を分節化するような心の動きを見せるものの、一方の「くま」は、「近隣にくまが一匹もないことを確認」し、それを理由に名をなのることを拒否する。これによつて「わたし」と「くま」は、「わたし」と「くま」としてあることができる。そのように散歩に出て、そのように川原で弁当を食べ、そのように抱擁を交わすことができる。「くま」との抱擁を「わたし」が「承知した」のは、「くま」にそのような事情があることを汲み取つてのものでしかなく、「くま」が動物であったことが障害としてあったのかどうかは分からない。しかし、「くま」が恥

じらいながら申し出た抱擁の場面を、仮にどのように読んだとしても、そこには読み手の恣意性が反映され、それに対する次なる反論を呼び寄せてしまうのである。

そのため、考察の目的とした「神様」の読みを深める「こと」に対して、提示し得るものは何もなかったというのが本節の結論である。「神様」において、「わたし」と「くま」の関係は、それに読み手が物語の意味を見出せるようなものとして、まるで機能していない。

つまり、「神様」とは、「わたし」と「くま」が散歩する物語なのである。しかしそのような読みこそが「神様」の独自性であり、あらゆる読み手にテキストを読むという行為を永久的に強いる深淵であると言える。¹⁹⁾裏を返せば「神様」は、自由な読みを無限に可能にさせる小説でもある。自身の名に対する「どうぞご自由に何とでもお呼びください」という「くま」の呼びかけは、そのまま「神様」の読み手に対する語りかけでもあるだろう。石川義正が示したように、「くま」は「グローバルな資本主義の進展によって急激に増大することになる「移民」の隠喩」でもあり得、どのようなシチュエーションにおいてもそれに合わせて「わたし」と「くま」の関係は読まれる可能性がある。だからこそ、「神様」は、二〇一一年の東日本大震災・福島第一原発事故後に、「神様 2011」『群像』第六巻第六号、二〇一一年六月）として新たに改作され得たのではないだろうか。

そして、このような意味付けできない「神様」から約四年後、その後日譚として発表されたのが、「草上の昼食」である。「草上の昼食」は、川上が作家としてのキャリアを着実に積み重ねていく過程

において発表されている。²¹⁾「神様」に続いて「草上の昼食」はなぜ、書かれなければならなかったのか。次節では、「神様」から続いた「草上の昼食」における「わたし」と「くま」の関係について確認していきたい。

四 関係らしい関係のない異類との断絶

先行研究において、「草上の昼食」は「神様」と併せて論じられることがほとんどである。「神様」における「くま」がオレンジの皮を食べる場面に、「わたし」と「くま」の齟齬を読み取った清水良典²²⁾は、それが両者の関係の「耐えがたい亀裂を潜めている」として、「続編の「草上の昼食」になると、亀裂はグロテスクなまでに拡大している」と指摘している。例えば清水は、「神様」よりも豪華になった「くま」の料理に、学校に入れない「くま」の「大変な勉強と努力の跡」を看取し、「そんなくまに「難儀なことは多かろう」と同情する「わたし」は、くまの努力を称賛するよりは、痛ましい複雑な思いで眺めている」と分析している。

「くま」は鍼に行っても、人間と「ツボが違う」（一八〇頁）せい、効きづらく、また「くま」が運転する車は、「ともだちに譲ってもらったセコハン」であるが、それも実際には「車を買おうかバイクを買おうか迷った中古車売場の雑誌を見ていくつかの店に電話したが、くまだとわかれるとどの店も態度がひややかになった」（一七七頁）ことと無関係ではないだろう。先の「神様」論では、「くま」が人間と異質であると同時に同質であることを指摘したが、

「草上の昼食」では、「くま」の異質性、つまり、「くま」が動物であることが強調され、人間と共に生活する「くま」の生きづらさが前景化していると言える。⁽²³⁾

そのため、「草上の昼食」に異類同士であった「わたし」と「くま」の断絶を読み取ることは、確かに妥当であるとも考えられる。両者の断絶の主たる要因となったのが、「くま」の身体の変化である。「草上の昼食」では、「くま」が自分の身体をコントロールできなくなり、人間と「くま」の身体の違いを意識せざるを得なくなっている。

「結局馴染みきれなかったんでしょ」目を細めて、くまは答えた。

馴染んでいたように思っていたけど。言おうとしたが、言えなかった。ほんの少しなめたワインのせいだろうか、くまの息は荒いだけでなく熱くなっている。

わたしも馴染まないところがある。そう思ったが、それも言えなかった。かんたんに、くらべられるものではないだろう。くまが手づかみで皿の上のいんげんをごっそりと取り、口に放りこんだ。もぐもぐ噛む。しっかりした音をたてて、くまはいんげんを噛みくだいた。じっと見ていると、くまははっと気づき、あわててのひらをタオルでぬぐった。

「失礼、つい手づかみで食べてしまいました。ぼんやりしてまして」

いいのに。いつもしているように食べればいいのに。

「どうもこのごろいけません。合わせられなくなってきました」
合わせることもなんてないのに。

「そうでしょうか」

(「草上の昼食」一八四頁)

故郷に帰る理由を打ち明けた「くま」は、「わたし」の視線によって、自分がいんげんを「つい手づかみで食べてしま」っていたことに気付き、「ぼんやりしていい」とあわてて弁解する。このような「くま」の弁解は、「神様」において「くま」が「つい足が出てしま」って本能的に魚を掴み上げたことに對する説明付けと同様ではあるが、しかしそれとは対照的に、ここで「わたし」は「くま」の身体の異質性を度外視することができない。身体を「合わせられなくなってきた」、人間に「馴染みきれなかった」と話す「くま」に対して、「わたし」は自分の思ったことを吐露する。しかし、このように明らかにする「わたし」の心の動きは、そのまま両者が類を異にする者同士であることに對する意識の表れでもある。

「神様」において成立していた両者の、「わたし」と「くま」としての関係はこのようにして齟齬が生まれる。異類であることの分かり合えなさによって、両者は気まずく沈黙してしまう。そして、両者の齟齬が決定なものになるのが、散歩していた「わたし」と「くま」が雷雨に見舞われる場面である。

「怖くないですか」くまが静かな声で聞いた。

少し。少しこわい。わたしはくまに包まれながら答えた。声

がくぐもった。くまは頷き、さらに強くわたしを包みこんだ。ひととき大きな雷鳴が響き、わたしは悲鳴をあげた。くまが笑う。

「気持ちいいじゃありませんか」そう言って、くまは笑った。くまの胴体の中でくまの笑いがぼわぼわと共鳴した。雷鳴はますます大きくなる。次の瞬間、いなびかりと雷鳴はまったく同時に、からだ全体にどん、という衝撃が走った。くまごしに、大きな衝撃が走った。近くに落ちたのだろうか。

くまは衝撃が走ると同時にわたしから身を離し、大きな声で吠えた。おおおおお、と吠えた。どんな雷鳴よりも大きな声で、くまは直立して空に向かって吠えていた。びりびりと空気が振動した。雷鳴といわずまの間隔はいくらか開きはじめていた。くまは何回でも、腹の底から吠えた。こわい、とわたしは思った。かみなりも、くまも、こわかった。くまはわたしのいることをすっかり忘れたように、神々しいような様子で、獣の声をあげつづけた。

「草上の昼食」一八六—一八七頁

「怖くないですか」と言う「くま」にとって、「こわい」と答える「わたし」は、庇護の対象としてあったと考えられるが、次第に「くま」は、雷鳴に悲鳴をあげる「わたし」とは対照的に、「気持ちいい」と述べるようになり、その庇護者的なあり方さえも失われる。そして、雷鳴がますます大きくなると、「くま」は人間との同質性を示していた人語を話すのをやめ、「わたしのいることをすっかり

忘れたように」、「くま本来の発声」で吠える。他者を認識することが不可能になるまで、「くま」は自然界のカオスに「馴染みき」り自分自身を開放させる。その一方で「わたし」にとって、そのような「くま」は、神々しさまで感じられる超越的な他者としてある。「わたし」は、異類である「くま」の他者性を「こわい」ものとして痛感するのである。

人間との同質性を失い、異質性を際立たせた「くま」の本来的なあり方を、「わたし」が目の当たりにする雷の場面は、「くま」が故郷に帰る理由をどうしようもなく「わたし」に納得させてしまうものだったと考えられる。そして、両者が類を異にする者同士であることを象徴するのが、人と熊の〈神様〉の違いである。

熊の神様って、どんな神様なの。

かみなりがおさまると、雨もじきに止んだ。くまはあたりに散らばっていたバスケットや水筒を拾い集め、泥汚れをタオルで大ざっぱに拭きとり、ぶるぶると体を揺らして水を切った。水滴が飛び散る。わたしも真似をして体をゆすってみたが、くまのようにうまくはまき散らせない。ひとしきり共に水をはねかせた後に、わたしはくまに聞いたのであった。

「熊の神様はね、熊に似たものですよ」くまは少しずつ目を閉じながら答えた。
なるほど。

「人の神様は人に似たものでしょう」
そうね。

「人と熊は違うものなんです」目を閉じきると、くまはそつと言った。

違うのね、きつと。くまの吠える声を思い出しながら、わたしもそつと言った。

〔「草上の昼食」一八七—一八八頁〕

「熊に似たもの」「人に似たもの」である〈神様〉は、それぞれ熊と人の類型の象徴としてある。身体が基づくそもその類型の違いは、共通の言語を話したり、振る舞いを真似したりしても解消されることはない。そのような類を異にする者同士の論理に基づいて、「くま」は「わたし」と「このたびは抱擁しな」い。少なくとも「わたし」には、もはや「くま」と、「親しい人」同士としてただなんとなく親密な関係にあることが決してできないと思われるのである。同時に、「くま」の帰郷を引き止める理由になるほどの関係らしい関係が「わたし」にはなかったことが、ここでも明らかになる。

このような点から、「わたし」と「くま」それ以外に意味付けできない分節可能な関係を示す「神様」とは対照的に、「草上の昼食」では関係らしい関係のなかった異類との断絶が示されていると考えられる。このようなモチーフは、「草上の昼食」発表までの川上の諸作品における、一人称の語り手「わたし／私」と異類との関係に共通するものだと考えられる。⁽²⁴⁾「わたし／私」はよく分からない異類と、よく分からない関係を持つ一方で、結果的にはその異類との別離が示される。⁽²⁵⁾「草上の昼食」でも、「わたし」に届いた「くま」からの手紙には名前がなく、住所を読み取ることも不可能であ

り、それによって「くま」との関係が困難なものになってしまったことが推測できるだろう。

しかし、ここで問題となるのが、それではやはり、「草上の昼食」は「神様」の補足的なテキストとしてあるのか、という点である。意味付けできない「わたし」と「くま」の関係を示す「神様」を源泉としながら、「草上の昼食」は、川上文学に通底する、関係らしい関係のない異類との断絶というモチーフが合流した、その帰着点にある小説に過ぎないのだろうか。

そこで、以上の問題について考えるために、次節で注目したいのが、類を異にする者同士であることが明らかになってからの「わたし」と「くま」の関係である。確かに、「人と熊は違うもの」かもしれない。しかし、そのことは、「わたし」と「くま」の関係が断絶する理由に必ずしもなるとは限らないのではないか。なぜなら、雷の場面を経ても「わたし」はその場から立ち去るようなことはせず、「くま」と会話をして散歩を続けているからだ。「くま」の人間との同質性は、正確には失われていないのである。

そして、そのような「くま」の変わらないあり方は、「くま」から届いた手紙にも示されているだろう。それを読んで「わたし」は、「少し泣いた」(二九一頁)と心が動かされる。このような「草上の昼食」結末部はどのように読み解くことができるのか。次節では、以上についての考察を踏まえて、「神様」「草上の昼食」の連関の意味、さらには川上文学における位置付けを検討していく。

五 「くま」の手紙の変わらなさと「わたし」の葛藤

前節では「わたし」と「くま」の関係の断絶について確認した。しかしここで、両者の断絶の理由について考えてみると、それは、直接的には「くま」が故郷に帰る決心をしたからであり、両者が身体の異なる異類同士であることは、実は間接的な原因でしかない。確かに、「くま」は、自分の身体が変化したことに起因して、故郷に帰る「しおどき」(一八二頁)を感じていたのかもしれないが、しかし、「くま」の人間との同質性が失われていない以上、それはあくまで「くま」の個人的な事情の範囲内に収まってしまふ。つまり、「わたし」と「くま」の関係が断絶したのは、「くま」に「しおどき」が来たから、という実はいく分らない理由なのである。

それに加えて、「くま」から届いた手紙の内容を見ると、「くま」はなぜ故郷に帰ったのか、読み手はいよいよ分からなくなる。

拝啓

今年は例年にない暑さとか。いかがおしのぎですか。

故郷に帰ってすでに二ヶ月が過ぎました。

ご無沙汰心苦しく思っております。

商売でも始めようかと考えておりましたが、毎日魚を採ったり草を刈ったりしているうちに、いつの間にか時間がたつてしまします。

こちらでは毎日が早いのです。

そちらで身についた習慣もだんだんに忘れます。

楽しく暮らしております。

料理もしなくなりました。しなくなると、どうやってあのようなことができたのだか不思議になります。

ときどき夢を見ます。

貴方さまと草原に寝ころんで魚の皮などをゆつくりかじっている夢です。

貴方さまもどうぞお元気で。

夏風邪などお召しになりませぬようお祈り申し上げます。

敬具

(「草上の昼食」一八九—一九〇頁)

ここで明らかになるのが、「くま」は故郷に帰ったとしても、その生活は現実の人間のそれとあまり大差ないということである。「身についた習慣もだんだんに忘れ」ることも、「料理もしなくなる」ことも、人間にとってはあり得なくはないことの範囲内であり、「くま」が異質な動物であるからだとあえて意味付けることはできない。「くま」の手紙に示される人間との同質性は、「くま」が動物であるから、身体を「合わせられなくなってきた」、人間に「馴染みきれなかった」から故郷に帰るしかなかった、という論理を再び揺るがせるのである。

「くま」の人語を話す能力が失われるのかどうか分からないが、「わたし」の名前と住所を知る「くま」は、その気になれば「わたし

し」にいつでも手紙を書くことができる。しかし、「くま」の名前と住所が分からない以上、「わたし」は「くま」に手紙を送ることすらできない。そのような非対称性による「わたし」の痛切な事情を分かっているのかいないのか、「くま」は「楽しく暮らしております」というのんきな近況報告を手紙に書いて寄越す。「くま」の手紙は、ただの手紙、つまり、他の何者でもない分節不可能な「くま」としての「わたし」に対する手紙としか意味付けしようがないのである。同時に、手紙と同様に、夢も夢でしかなく、「くま」が描いた絵も、「わたし」との関係における親密さを示すものでしかない。

これらのことは、故郷に帰った「くま」にとつて、「わたし」との関係が変わらないものであったことを示すだろう。確かに、両者が散歩に出た先での雷雨の経験は、「わたし」と「くま」が類を異にする者同士であることを明らかにした。しかし、だからと言って、「わたし」と「くま」の関係は変わる必要がない。「くま」にとつて、「わたし」と「くま」はそのままそれぞれが分節不可能な「わたし」と「くま」として関係し得るのである。

「くま」の手紙は「わたし」に、故郷に帰った「くま」の分からなさを思わせる。このような「くま」の分からなさは、「神様」結末部において「わたし」が「熊の神」を想像するも、「見当がつかなかった」ことに呼応するだろう。前節で確認したように、「草上の昼食」は確かに類を異にする「わたし」と「くま」の分かり合えなさを前景化させながら、しかし「くま」の手紙は、それが両者の関係が断絶した決定的な理由となることを回避させるのである。

そしてこの「くま」の分からなさは、「わたし」にとつて「くま」

が意味付けできない存在にあることを示す。言うなれば、「わたし」と「くま」の関係の断絶は、自分の素性を少しも明かさずに「しおどき」と言つて故郷に帰った「くま」の意味の不確定性にあると考えられる。しかし、「神様」において「わたし」が「くま」の意味の不確定性を放置したままでの対照的に、「草上の昼食」において「くま」の手紙を読んだ「わたし」は、「少し泣いた」と自身自身の心の動きを表出させる。

お手紙ありがとう。

またいつか草原にピクニックに行きましょう。

オーブンアップルパイの作りかた、そのうちに教えてください。

お元気で。

何回書き直しても、くまのようなきちんとした手紙にならなかった。最後まで名前のないくまだだったと思いながら、宛先が空白になっていく封筒に返事をたたんで入れ、切手をきちんとして、裏に自分の名前と住所を書いてから、机の奥にしまった。寝床で、眠りに入る前に熊の神様にお祈りをした。人の神様にも少しお祈りをした。ずっと机の奥にしまわれているだろうくま宛の手紙のことを思いながら、深い眠りに入っていた。

（「草上の昼食」一九一—一九二頁）

「くま」からの手紙が、「わたし」と「くま」の意味付けできない

関係の変わらなさを提示している以上、「わたし」の手紙にはその関係に対する応答が求められることになる。そこで「わたし」が書いた手紙の文面に注目すると、それは「くま」と会うことを前提にした、約束を交わすような手紙であり、「くま」ののんきな近況報告の返答としてはあまり噛み合っていないことが分かる。「わたし」自身、それが「くま」のようなきちんとした手紙」ではないと思っている。

なぜ、「わたし」は「くま」のような手紙を書くことができないのか。「くま」と会うことを前提にした「わたし」の手紙には、そこに「わたし」の、「くま」に会いたいと思わずにはいられないという痛切な心の動きを認めることができるだろう。「神様」において、「わたし」は「無言」のまま、ただそこにいることで、分節不可能な「わたし」としてあった。しかし、それは「くま」との関係に対する「わたし」の心の動きがテキストから読み取れなかったからに過ぎず、「わたし」がものを思い、感じ、考え、その心の動きを語ってしまえば、そこに「くま」との関係の意味は見出されることになる。「わたし」が「くま」に向けて書く手紙は、ただそこにいるだけだった「わたし」の、両者の意味付けできない関係に対する応答である反面、それとは矛盾した、「くま」に会いたいと思わずにはいられない心の動きを表出させる機能が付与されてしまうのである。

このような手紙の機能の矛盾こそが、「わたし」が手紙を書けない理由であり、それと同時にこのことによつて「わたし」は、「くま」の手紙に提示されるような分節不可能な「わたし」のままで「くま」と関係することがもはやできないという現実を突き付けられた

と言えるだろう。本当ならば「わたし」も「くま」と同様に、異類同士であることを意識せずに、「わたし」と「くま」そのままの関係でいたいと思っている。その一方で、「わたし」にとつて雷の場面での「くま」は紛れもなく異類としてあった。また「わたし」自身、「神様」には示されていないだけで、実際には年齢も性別も職業も意味付け可能な存在にある。そもそも、「くま」が「わたし」に好意を持ったのは、「わたし」の「名字」がきっかけだった。「くま」が「最後まで名前のないくまだった」こととは対照的に、封筒の裏に「自分の名前と住所」を書ける「わたし」は、他者による意味付けから逃れられない人間である。「くま」の手紙は、意味が確定され得ることについての「わたし」と「くま」の、非対称性を明らかにするのである。

しかし、ここで改めて注目したいのが、このように「わたし」が、「くま」の手紙で提示された関係における「わたし」であり得ないことが分かっているながら、それでも「くま」に向けて手紙を書くこととするその切実さである。「くま」への手紙を何回も書き直すことを通して、「わたし」は、自分自身が意味付けから逃れられない人間でありながら、何者でもない「わたし」として、関係を意味付けない「くま」の手紙への応答を果たそうとするのである。他者との一対一のコミュニケーションである手紙を書くという行為は、そのような「わたし」の自己矛盾を絶えず照らし出す。「わたし」は、「くま」への手紙を通して、「くま」との関係だけでなく、「わたし」自身のあり方と向き合うことを迫られるのである。「わたし」は「くま」にとつての異類なのかどうか、そもそも「わたし」とは何者な

のか。そのような自分自身に強いられる意味付けについての問題と向き合いながら、同時に「わたし」は「くま」の手紙を何回も書き直す。手紙を書くことへの「わたし」の葛藤は、「わたし」と「くま」の関係を変わらないものとする「くま」の手紙に対して、もはや「わたし」であり得なくなった「わたし」の、自分自身が意味付けから逃れられない人間であることへの葛藤でもあるだろう。

「草上の昼食」結末部において、このような葛藤を「わたし」が乗り越え、解決してしまうようなことはない。「わたし」は「わたし」の自己矛盾を抱き続けたまま、手紙を書くことを何回も試み、最後まで「ずっと手紙の奥にしまわれているだろうくま宛の手紙のことを思い」続ける。「熊の神様」「人の神様」へのお祈りは、「わたし」が、両者が異類同士であることへの意味付けを受け入れたというよりも、「わたし」と「くま」が「わたし」と「くま」としてあるために、それぞれの類の象徴に祈らざるを得なかったと考えられるのではないか。当然、このような〈神様〉へのお祈りは、「くま」との関係における「わたし」の矛盾を体現している。しかし「わたし」は、意味を確定させることに對する自己矛盾を解消することのないまま、テキストにおいて最後まで、「くま」との関係における意味に葛藤し続けるのである。

あらゆる読み手にテキストを読むという行為を永久的に強いる「神様」に対して、「草上の昼食」は一見すると、両者が分かり合えない異類同士として関係が断絶するという意味を確定し得る物語としてあった。同様に先行研究においても「草上の昼食」は「神様」の補完的なテキストとして、「わたし」と「くま」が類を異にする者

同士であることを前提に、よく分からない異類との関係という観点で確かに川上文学に位置付けられてきた。しかし、「くま」の手紙は、「わたし」と「くま」の関係の、確定され得た意味を揺るがせ、同時にその意味の揺らぎに「わたし」は葛藤し続ける。「わたし」の葛藤はまさしく、「神様」を読むあらゆる読み手の葛藤と重なるものであり、それが示されることによって、「草上の昼食」も「神様」と同様に、最後まで意味付けできないテキストとしてあると言えるだろう。

そしてここに、「神様」というささやかな小説によってデビューした川上の、作家としての貫徹した態度が見出せるのではないか。どのような意味付けできない「神様」を読み解こうとする読み手と、「くま」の手紙に対する「わたし」の二重写しを利用することで、「草上の昼食」結末部には、確かにそこに意味を存在させる言語的構築物を創造しながら、一方で決してその意味を確定させないさらなる地平へ読み手を導こうとする川上の目論見が示されているのである。「草上の昼食」は「神様」の単なる補完的なテキストとしてあるのではなく、意味が確定し得るのにあえてそれを不可能にさせる点に独自性があり、意味付けできない「神様」によってデビューした川上の、作家としての態度を示した作品だと言える。

六 おわりに

以上、本論では川上弘美「神様」「草上の昼食」について、連関する両作の川上文学における位置付けを検討してきた。人語を話す動

物の「くま」は人間との異質性と同質性を併せ持ち、現実と虚構の混在具合が不確かな「神様」は、意味付けできない物語としてあった。それぞれ秘匿性を持つ「わたし」と「くま」は、それぞれ「わたし」と「くま」としてしか意味付けできない関係にある。「神様」は、あらゆる読み手にテキストを読むという行為を永久的に強いる意味の不確定性に独自性があるが、「草上の昼食」は一見すると関係らしい関係のなかった両者が、異類同士であるための分かり合えなさによって関係が断絶する物語として読めてしまう。しかし、「わたし」の「くま」の意味付けできない関係を変わらないものとする「くま」の手紙は、両者の関係の意味を再び揺るがせ、その意味の揺らぎに「わたし」は葛藤し続ける。「草上の昼食」は「神様」の単なる補完的なテキストとしてあるのではなく、意味が確定し得るのにあえてそれを不可能にさせた点に独自性があり、意味を確定させない地平へと読み手を導こうと目論む、川上の作家としての態度を示した作品だと考えられる。これを本論の結論とした。

川上は芥川賞受賞後に刊行された『蛇を踏む』（文藝春秋、一九九六年九月）の「あとがき」において、「自分の書く小説を、わたしはひそかに「うそばなし」と呼んでいます」と述べ、続けて「うそ」の国は、「ほんと」の国のすぐそばにあって、ところどころには「ほんと」の国と重なっているぶぶんもあります。「うそ」の国は、入口が狭くて、でも、奥行きはあんがい広いのです」としている。ここでの「奥行き」は、本論での「神様」「草上の昼食」の考察が示したような、どのようにも作品の「読みを深める」ことができてしまう「うそばなし」の意味の不確定性が生み出すものだと言えるだ

ろう。

特に「あとがき」における「うそばなし」の一篇としてある「蛇を踏む」は、芥川賞の選評において石原慎太郎が酷評したように、「蛇がいったい何のメタファなのかさっぱりわからない」小説でもある。その後の先行研究では、蛇が、「形がなく把握できず言語化しにくいものの象徴」であり、「内面および無意識の具現化」であり、かつ、「女性の共同的なジェンダー・アイデンティティの象徴」でもあるとして、複数の意味が一举に読み込まれている⁽²⁷⁾。しかし、「蛇」の意味を確定しようとすると、どうしても論理的な無理が生まれてしまう。関係らしい関係のなかった「くま」とは対照的に、「蛇」はヒワ子の部屋に現れて、「お母さん」という関係を強引に主張する。小説を意味付けようとする読み手を、川上弘美は、どのような「うそ」の世界に誘おうとしているのか。本論の考察を踏まえながら、川上の「うそばなし」の機構をさらに明らかにしていく。

※「神様」「草上の昼食」の引用はそれぞれ、『神様』（中央公論新社、一九九八年九月）所収「神様」「草上の昼食」に拠る。引用に際し、ルビの省略など適宜表記を改め、引用末尾に頁数を付した。なお特に断りのない限り、引用部における傍線、記号等は引用者によるものである。

《注》

(1) 筒井康隆・井上ひさし・小林恭二選「神様」川上弘美（ASAHI

Iネット編『パスカルへの道 第1回パスカル短篇文学新人賞』
中央公論社、一九九四年一〇月 一七六頁

- (2) 青柳悦子「あるようなないような 気配と触覚のパラロジカル・ワールド」(土田知則・青柳悦子『ワードマップ 文学理論のプラクティス 物語・アイデンティティ・越境』、新曜社、二〇〇一年五月) 二二二頁

- (3) 高柴慎治「川上弘美「神様」を読む」(『国際関係・比較文化研究』第五卷第二号、二〇〇七年三月) 三二四頁

- (4) 例えば、「川上の作品は、すべて性愛をテーマとしている」一方で、「くま」の表記が童話的な平仮名であることで、「神様」「草上の昼食」がその例外となっていることを指摘している千石英世「甘噛みのユートピア——川上弘美論」(『文学界』第五七卷第一〇号、二〇〇三年一〇月、一五九〜一六〇頁)や、「神様」が、「日本という共同体に対する明快な批判を企図している」と考え、集合住宅に引越してきた「くま」を「移民」の隠喩」として「外国人の滞在という主題」を読み取る石川義正「動物保護区の平和」(『政治的動物』、河出書房新社、二〇二〇年一月、一一一〜一二三頁)などがあり、両作の連関によって多様な視座からのアプローチが可能になっていると言える。

- (5) 清水良典「現代作家論シリーズ第一回 川上弘美覚書——フツウの「私」の行方」(『文学界』第五〇巻第七号、一九九六年七月) 一九七〜一九八頁

- (6) 大塚英志「サブカルチャー文学論第十回 「物語」と「私」の齟齬を「物語」ということ——川上弘美論」(『文学界』第五三巻第一

〇号、一九九九年一〇月) 二六四頁

- (7) 加藤典洋「九〇年代小説の新しさ」(『小説の未来』、朝日新聞社、二〇〇四年一月) 六七頁

- (8) 高柴慎治、注(3) 前掲論文、三一九頁

- (9) 加藤典洋、注(7) 前掲著書、七〇頁

- (10) 松本和也「第一章 川上弘美の出発／現在 「神様」・「草上の昼食」・「神様2011」」(『川上弘美を読む』、水声社、二〇一三年三月) 二八〜三一頁

- (11) 関谷一郎「川上弘美「神様」の読み方・教え方——松本和也氏の論考をたたき台にして」(『現代文学史研究』第二二集、二〇一四年一二月) 四一頁

- (12) 「わたし」と「くま」の連帯や寄り添い合う関係性を認める論としては、清水良典「デビュー小説論 第7回 くまと「わたし」の分際——川上弘美『神様』(『群像』第七〇巻第八号、二〇一五年八月)や、古守やす子「語り」の構造から立ち現れる「神様」——川上弘美『神様』『神様2011』——」(『日本文学』第六六号第七巻、二〇一七年七月)が挙げられる。

- (13) 松本論以外にも、例えば、佐野正俊「川上弘美「神様」の教材性——教室における読むことの倫理」(田中実編『読むことの倫理』をめぐって 文学・教育・思想の新たな地平』、右文書院、二〇〇三年二月)や、鎌田均「自分とは何か」を問いつける〈言葉の力〉…川上弘美『神様』を例にして」(『日本文学』第六〇巻第一号、二〇一一年一月)などの論があり、近年でも、動物を視座にした大原祐治「動物・ことば・時間——〈動物と人間の文学誌〉のための覚え

書き」(『千葉大学人文社会科学研究』第三二号、二〇一六年三月)が挙げられる。

- (14) 青柳悦子、注(2) 前掲論文、一九九〇二〇〇頁
- (15) 松本和也、注(10) 前掲論文、二五頁
- (16) 石川義正、注(4) 前掲著書、一一五―一六頁
- (17) 「わたし」の「無言」について、例えば清水良典(注(12) 前掲論文、一五九頁)は、「安易に慰めるようなことを口にすれば、かえって「くま」を傷つける微妙さを感じとっている「わたし」が「配慮」の細やかな人」であることを、荒木奈美「「くま」の生きづらさを通して見えてくるもの——川上弘美「神様」「草上の昼食」論」(『ユリイカ』第四五巻第一二号、二〇一三年九月、二〇四頁)は、「「くま」のさりげない思いやりや優しさにも気づけない人間が幅を利かせている「個人化の進行した」社会」に「自分自身も「人間の一人としてそこに属しているからこそやるせない、容易に言葉にはし難い、まさに「静かな怒り」「自分自身に向かってくる怒り」の発現」をそれぞれ読み取っている。
- (18) 川上弘美・穂村弘「「対談」恋人に期待なんてしない」(『ユリイカ』総特集 川上弘美読本『第三五巻第一三九号九月臨時増刊号、二〇〇三年九月) 六四頁
- (19) このような読みは、加藤典洋(注(7) 前掲著書)や高柴慎治(注(3) 前掲論文)の指摘に呼応するものである。本論はそれを「わたし」と「くま」の関係の分析を通して検討した。
- (20) 石川義正、注(4) 前掲著書、二三頁
- (21) 「神様」を発表した川上は、その五か月後に「物語が、始まる」に

よって文芸誌デビューを果たし、一年半後には「蛇を踏む」で芥川賞を受賞する。その後、短編集『物語が、始まる』(中央公論社、一九九六年八月)、『蛇を踏む』(文藝春秋、一九九六年九月)が刊行され、初の長編小説『いとしい』(幻冬舎、一九九七年一〇月)を書き下ろしで発表したその後で、短編集『神様』に収められる諸作品の連載が「夏休み」(『マリ・クレール』日本版)(第一六巻第一二号、一九九七年十一月)によって始まる。

- (22) 清水良典、注(12) 前掲論文、一六七頁
- (23) 大原祐治(注(13) 前掲論文)は、「くま」が人語を繰り、人間の生活習慣を繊細に学び取ったとしても無化されない、人間と動物の境界線について論じている。
- (24) 例えば、「神様」に続いて発表された「物語が、始まる」において、「くま」と同様に異類として分類される「雛型」は、語り手「私」である山田ゆき子に公園で拾われ成長し、「三郎」と名付けられ、ゆき子と抱き合う恋人同士のような関係になるが、両者はセックスをすることができず、同時にゆき子は三郎の母親にもなり切れず、結局、両者の関係の内実はよく分からない。短編集『神様』でも、「夏休み」において「わたし」は、「白い毛の生えた」「小さいもの」「三匹の、「保護者」らしき存在になるが、その関係の意味は確定できず、「花野」(『マリ・クレール』日本版)第一六巻第二二号、一九九七年一二月)においても、死んだ叔父が関心を持っているのは、残された「家族」である妻の万里子と娘の花子のことくらいであり、実際に会いに来た「わたし」ではない。
- (25) 先行研究でも、「わたし／私」と異類との関係と断絶は、先に挙げ

た青柳悦子（注（2）前掲論文）や高柴慎治（注（3）前掲論文）、他には田中和生「孤独な異界の「私」——川上弘美論」（『文学界』第五六卷第一二号、二〇〇二年十二月）などの、川上文学を概観した論において言及がある。

（26）石原慎太郎「第一一五回芥川賞選評 不毛の証左」（『文藝春秋』第七四卷第一一号、一九九六年九月）四三五頁

（27）カトリン・アマン「第四章 境目が消える日常 川上弘美『蛇を踏む』（『歪む身体 現代女性作家の変身譚』、専修大学出版局、二〇〇〇年四月）一三八〜一五〇頁

【付記】

本稿は、令和三年度東北大学文芸談話会研究発表会での口頭発表「川上弘美「神様」「草上の昼食」論——「くま」の異質性と同質性に着目して——」（オンライン開催、二〇二二年二月二二日）に基づく。ご指導いただいた方に、感謝申し上げます。

——いしかわ・たくと／博士課程前期一年——